

アナフィラキシーとは、ハチ毒や食物、薬物等が原因で起こる、急性アレルギー反応のひとつです。アナフィラキシーは、じんましんや紅潮(皮膚が赤くなること)等の皮膚症状や、ときに呼吸困難、めまい、意識障害等の症状を伴うことがあり、血圧低下等の血液循環の異常が急激にあらわれるとショック症状を引き起こし、生命をおびやかすような危険な状態に陥ってしまうことがあります。これをアナフィラキシーショックと呼びます。

アナフィラキシーを引き起こすきっかけには、ハチ毒アレルギー、食物アレルギー、薬物アレルギー等があります。最近では、この他にもラテックス(天然ゴム)によるアナフィラキシー等が注目されています。

アナフィラキシーの症状

アナフィラキシーでよくみられる症状として、じんましん、呼吸困難、腹痛、嘔吐、下痢、および血圧低下を伴うショック等があげられます。これらの症状は、人によって、またアレルゲンの量等によっても異なります。じんましん等の皮膚症状は、はじめにみられることが多く、また9割以上の患者さんに出てくるといわれています。

アナフィラキシー症状がでる時間はアレルゲンによって異なります。ハチに刺された時のように、皮膚からハチ毒等のアレルゲンが入ったときには、早いときにはハチに刺された後、数分～15分以内には症状がでてきます。それに対し、食物の場合は口から食べて胃や腸で消化・吸収されてからアレルゲンになるため、食後30分～1時間くらいはかかります。

また、数時間後に症状が再びあらわれることもあり、一度、症状が落ち着いたからといって油断してはいけません。

アナフィラキシーで怖いのは、ショック等により死に至ることがあることです。その多く

は、喉のはれや痛み等を伴う気道閉塞(気道が塞がれること)、不整脈による心停止、重篤な酸素欠乏状態、血圧低下等が原因になっています。



アナフィラキシーは、重症になると血圧低下を伴うショック症状といった一刻を争う危険な状態に陥ることもあります。ハチに刺された後、食事をとった後、薬を飲んだ後に「おかしい！いつもと何か違う！」体の異常を感じたら、アナフィラキシーの疑いがあるかもしれません。症状の出方は人によって異なります。少しでも異常を感じたら、考え得る原因をきちんと記録し、医療機関に行って医師に相談しましょう。また、自分でも過去の症状を理解しておきましょう。

アナフィラキシーの治療

原因物質(アレルゲン)の回避こそ最強の対策！

アナフィラキシーを回避する最も有効かつ基本的な方法は、原因となるアレルゲンを避けることです。特定の食物や薬物に対してアレルギーのある患者さんは、それらを摂取あるいは服用することのないよう注意が必要です。また、自分がハチ毒に対してアレルギーであることがわかっている場合は、ハチのいる可能性のある場所にはなるべく近づかない、肌を露出しない等の対策が必要になります。

アナフィラキシーに有効な薬

アナフィラキシーは、症状の発現を速やかに察知し、一刻も早く治療をしなければなりません。医療機関では症状を緩和する目的で救急用として、通常、アドレナリンという薬が使われます。特にアナフィラキシーショックを引き起こしている時には、アドレナリンの注射が真っ先に行われます。

アドレナリンは、気管支や血管に働いて呼吸困難や血圧低下等のアナフィラキシー症状を改善します。また、肥満細胞や好塩基球からのケミカルメディエーターの放出(脱顆粒)を抑える働きがあるといわれています。

★医師から処方される薬で、自己注射用アドレナリン注射液があります。自己注射とは、患者さん自身で薬を注射することです。今までハチ毒によるアナフィラキシーを経験したことがある方、また、その危険性が高いと予想される方は、自己注射用アドレナリン注射液が必要かどうかを医師に相談した方がよいでしょう。

★アドレナリンは血圧低下等を伴うアナフィラキシー症状を緩和する補助治療剤です。アドレナリンの自己注射(筋肉内注射)は、あくまでもアナフィラキシーの対症療法です。アナフィラキシーを根本的に治療するものではありません。直ちに医師による治療が必要です。その他の薬として、抗ヒスタミン薬、ステロイド薬、気管支拡張薬等の投与が行われることもあります。